

# プラトニズムの歴史における『ティマイオス』の伝統

Tsuchiya, Mutsuhiro / 土屋, 睦廣

---

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

2018-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014528>

# プラトニズムの歴史における『ティマイオス』の伝統

土 屋 睦 廣

## はじめに

本稿では、古代におけるプラトニズムの歴史の中で、『ティマイオス』（以下 *Tim.* と略す）がいかに重視されてきたかを概観したうえで、*Tim.* 解釈史のケース・スタディとして、プラトニズムの伝統の中でも歴史的に特別な地位を占める古代末期のカルキディウスを取り上げ、彼の *Tim.* 解釈を検討してみたい。

さて、現代のプラトン研究者に、プラトンの主著は何かと尋ねたら、おそらくいていの人は『国家』と答えるのではないだろうか。ところが、プラトニズムの長い歴史から見れば、プラトンの対話篇の中で最も大きな影響力を

もった著作は *Tim.* であった。周知のように、神による宇宙の製作とさまざまな自然学的理論が論じられる *Tim.* は、プラトンの対話篇の中ではむしろ特殊なものだが、古くからプラトンの信奉者たちから重視されてきた。とりわけ、紀元一世紀から二世紀のいわゆる中期プラトン主義と、それに続く新プラトン主義においては、この書はプラトンの著作の中でも特権的な地位を占めてきた。古代後期から中世を通じてのプラトニズムの歴史は、*Tim.* の解釈史であったと言っても過言ではない。この伝統が近世にまで及んでいることは、例えばラファエロの有名な壁画「アテネの学堂」の中で、プラトンが手にしている書物が *Tim.* であることにも象徴的に現れている<sup>1)</sup>。

## 一 『ティマイオス』の宇宙論の 枠組みと問題点

それでは、*Tim.*の伝統を概観するに先立って、*Tim.*の宇宙論の枠組みを確認しておこう。*Tim.*においては、「存在するもの」と「生成するもの」という、いわゆるイデア論の図式に、宇宙論的な「知性（ヌース）」と「必然（アナシケー）」が重ね合わされ、この対立する二項の図式が一貫した議論の枠組みとなつてゐる（cf. 27d-28b, 47e-48a）。そこに、宇宙の製作者という、いわば両者を仲介するものとしての神が登場する。

*Tim.*では、宇宙論全体の序論において、最初に考察すべきこととして、「宇宙は、いかなる生成の始まりもなく、常にあつたものなのか、あるいは、ある始まりから始まつて、生成したものなのか」（28b6-7）という問題が提起され、即座に「生成したものだ」という回答が与えられる。その理由は、宇宙は感覚されるものであり、感覚されるものは生成するものだからだと語られる。続いて、生成したものは何らかの原因によつて生成することが必然だと言われ、その原因者として「この万有の作り手にして父」（28c3-4）がいくぶん唐突に導入され、それは以下の箇所

で「デミウールゴス」（29a3）、「神」（30a2）と言い換えられていく。この箇所は、宇宙は過去のある一時点において生じたものなのか、あるいは永遠に存在するものなのか、換言すれば、神による宇宙の製作は歴史的事実として語られているのか、説明のための虚構なのかをめぐり、古代から現代に至るまで解釈者たちを悩ませてきた。また、先の二項の図式に当てはめれば、当然デミウールゴスは、イデアとヌースの側に属することになるだろう。しかし、イデアとヌースとデミウールゴスとが、それぞれどのような関係にあるのか、明確なことは *Tim.*において何も語られていない。

また、神は宇宙の身体の製作に先立って、「宇宙の魂」を作るが（34b-35c）、これもまたデミウールゴスと同じく、その正体と宇宙における位置づけに関して、後世にさまざまな議論を巻き起こした。そもそもプラトンによれば魂は永遠であるのに、それが生み出されるとはどういうことか。『パイドロス』（245c-246a）や『法律』第十巻（893b-896c）では、自己運動者としての魂が唯一の運動の原因とされているのに、*Tim.*では、宇宙の生成以前、つまり宇宙の魂が作られる以前に、物体が無秩序に動いていたと語られるが、その運動は何に起因するのか。これらの問題も、古代から現代に至るまで議論されてきた。

さらには、物体を説明するために、「生成するもの」の受容器としての「場（コーラー）」が導入される（48e-52d）。これも *Tim.* にのみ登場する概念で、イデアと生成するものと「場」という三者の関係も、イデア論解釈の上で難しい問題を惹起している。

*Tim.* にはこれらの他にも解釈上の問題が無数にあるのだが、後のプラトニストたちは、それぞれに時代の要請と自らの関心に応じて *Tim.* をさまざまに解釈していくことになる。

## 二 古代における『ティマイオス』の伝統

### （一）初期アカデメイア派とアリストテレス

*Tim.* は、すでに初期アカデメイアの時代から議論や解釈の対象となっていたことが、さまざまな資料から窺われる。プラトンの後を次いで学頭となったスペウシッポスは、『ピュタゴラス派の数について』と題する書の中で宇宙の作り手である神と宇宙の範型（*τροπᾶνερμια*）について論じていた。彼と同時代のオプスのピリッポスは、*Tim.* に触発されて『エピノミス』を著し、この書は長らくプラトンの著作と信じられてきた。その中で提唱された天体への崇拜は、後のヘレニズム時代の思想にも少なからぬ影響を

与えた。スペウシッポスの後を次いで学頭となったクセノクラテスは、*Tim.* における神の宇宙製作を説明のための方便（*διόνοματιος χάρις*）と解釈した。<sup>③</sup> この解釈は後の多くのプラトニストに受け継がれた。プロクロスから「プラトンの最初の解釈者（*ὁ πρῶτος τοῦ Πλάτωνος ἐρμηνεύς*）」<sup>④</sup>と呼ばれた克蘭トルは、しばしば *Tim.* の注解書を最初に著した人物とされる。彼はアトランティス物語を史実とみなし、宇宙が「生成した」と言われるのは、ある一時点において生じたという意味ではなく、原因を他者に負っているという意味だと解釈した。<sup>⑤</sup> また、宇宙の魂の構成についても独自の解釈を提唱した。<sup>⑥</sup>

しかし、初期アカデメイアのメンバーの中で、後の *Tim.* 解釈史に最も大きな影響を与えたのは、やはりアリストテレスであろう。実際、現存するアリストテレスの著作の中でプラトンへの言及は、*Tim.* に関するものが一番多い。<sup>⑦</sup> アリストテレスの *Tim.* 解釈のうち、ここではとくに重要なものとして、次の四点のみを指摘しておく。

① 宇宙が「生成した」という記述を、他の初期アカデメイア派と異なり、字義通りに、すなわち過去の一時点において生じたと解釈したこと。<sup>⑧</sup> この立場は後にプルタルコスやアッティコスらに継承される。

② デーミウールゴスの存在を無視して、プラトンに形相

因と質料因しか認めなかったこと。<sup>9)</sup>

③ 数学的に構成された四元素説を批判し、さらに天の元素としてアイテールを導入したこと。<sup>10)</sup>

④ *Tim.* における「場」(*χώρα*)<sup>11)</sup>を自らの物質概念である質料 (*συν*) と同一視したこと。

アリストテレスの *Tim.* 解釈は、後のプラトニストたちにも多大な影響を与えた。

## (二) ヘレニズム時代

紀元前四世紀末から一世紀末にかけてのヘレニズム時代には、社会の激変にともない哲学にも大きな変化が起こる。この時代にはプラトンとアリストテレスの影は薄く、新たな学派が脚光を浴びるようになる。ヘレニズム初期に生まれ、以後数世紀にわたって最も栄えた学派はストア派であった。アカデメイア派は懐疑主義に染まり、ストア派との論争に明け暮れていた。一般的にプラトニストはストア派を目の敵のように批判するものだが、ストア哲学の形成にプラトン哲学が多大な影響を与えていることは明らかに、ストア派とプラトニズムの相互関係は近年盛んに論じられるテーマとなっている。ことに *Tim.* の影響は甚大である。これも要点のみを指摘すれば、能動原理としてのロゴスと受動原理としての物体、宇宙を支配するロゴスと人

間の理性の共通性、マクロモスとミクロコスモスの照応といったストア派の基本思想に、*Tim.* の影響を見て取ることが容易であろう。また、Festugière が *religion cosmique* と呼ぶストア派の神学的宇宙論<sup>12)</sup>には、*Tim.* のデーミウールゴスとしての神や宇宙の魂の観念が多大な影響を与えている。

## (三) 中期プラトン主義の時代

アカデメイア派が懐疑主義を脱した紀元前一世紀頃から、紀元後三世紀半ばに新プラトン主義が登場するまでの間のプラトニズムは、中期プラトン主義と呼ばれる。これは便宜上の呼び名で、アカデメイアや新プラトン主義のような、特定の学校や学派があつたわけではない。この時代には、書物の普及も相まって、アカデメイアだけではなく、地中海世界各地でプラトンの著作が読まれ、研究されていた。それでもこの時代のプラトニストたちには、かなりの共通点が見られる。彼らはいずれもプラトン自身の著作に立ち返り、そこから一定の教説を読み取って、体系的な哲学を作り上げようとした。近年の研究の進展によって、新プラトン主義のモチーフのほとんどがこの時代に出揃っていたことが明らかになっている。プラトンの著作の中でも *Tim.* が特権的な地位を占めるようになるのも、実

はこの時代からである。

このような新たなプラトニズムの起源については、さまざまな議論があるが、ここでは前一世紀後半にアレクサンドリアで活動したエウドロスに注目したい。彼はピュタゴラス主義者で、プラトンの教説はピュタゴラスに一致すると考えた。彼が人生の目的を「神に似ること (ὁμοιωσις θεοῦ)」としたことは、後の多くのプラトニストたちに受け継がれた。しかも彼によれば、この思想はピュタゴラスがオリジナルで、ソクラテスとプラトンがそれを継承したとされる。<sup>13</sup> *Tim.* に関してもいくつかの解釈が伝わっており、注解もしくは何らかの著作を書いた可能性がある。*Tim.* 篇の語り手であるロクロイのティマイオスが書いたとされる書『宇宙と魂の本性について』は、後一世紀頃に書かれたピュタゴラス派による *Tim.* の翻案と言えるものだが、この書はエウドロスの著作を再構成したものだとい説が提起されている。<sup>15</sup>

この時代にはプラトンの著作に多くの注解書が書かれたが、最も多く注解されたのは *Tim.* であった。<sup>16</sup> もっともこれらはすべて現存しないので、ギリシア語で *chronographia* とか *ἐκτίμησις* と呼ばれるものがどのような著作であったのか定かではない（現存する『ティマイオス注解』は古代末期のカルキディウスとプロクロスのものだけ）。現存す

る当時の *Tim.* 関係の著作としては、プルタルコス『ティマイオス』における魂の生成について』と『プラトン哲学に関する諸問題』（十問のうち五問が *Tim.* の問題）がある。スミルナのテオン（二世紀）の『プラトンを読むのに役に立つ数学的事柄の解説』という書も *Tim.* を読むための解説書と言える。また、プラトン哲学全般の解説書であるアルキノオス『ディダスカリコス』（おそらく二世紀）は、中期プラトン主義のプラトン解釈を今日に伝える代表作と言えるが、全体の四割近くが *Tim.* に基づく記述になっている。

さらに、シリアのアパメイア出身のヌメニオス（二世紀後半）も、プラトニズムの歴史の中で重要な人物である。彼は徹底したピュタゴラスの信奉者だが、その哲学の実質はプラトンの著作の再解釈に基づいており、その中でも *Tim.* が重要な位置を占めている。しかも彼によれば、プラトンも完全にピュタゴラス主義者にされてしまう。<sup>17</sup> さらに、プラトンのことを「アッティカ語を話すモーセ」と呼んだのも彼で、プラトンの教説は東方の諸民族（インド、ユダヤ、ペルシア、エジプト、バビロニア）の古来の宗教思想とも一致すると主張した。<sup>18</sup> ピュタゴラス主義者にして東方の宗教の奥義にも精通しているというプラトンのイメージは、後の新プラトン主義にも受け継がれ、古代末期

から近世にわたって大きな影響力をもった。このようなプラトン観が確立される初期の段階で、ヌメニオスは極めて大きな役割を果たした。

後一世紀から二世紀はちょうどピュタゴラス主義が新たな脚光を浴びた時代で、いわゆる新ピュタゴラス派と呼ばれる人たちは、おおむねプラトンの著作をピュタゴラス主義によって再解釈した。例えば、ガデスのモデラトス（一世紀後半）が『バルメニデス』第二部の解釈から導き出した階層的な諸原理は、後の新プラトン主義の形成に大きな影響を与えた可能性が指摘されている<sup>19</sup>。

この時期に、*Tim.*に注目したのはギリシアの哲学者だけではなく、ユダヤ人哲学者アレクサンドリアのピロン（フィロン）は、聖書解釈を通じて、ユダヤ思想とギリシア哲学の融合・調和を試みた。『創世記』に記された神の世界創造の問題をいかに合理的に解釈するかが彼のテーマで、そのさい彼が援用したのが *Tim.* であった。彼の思想はキリスト教神学の「ロゴス＝キリスト論」の形成に大きく寄与すると同時に、後のプラトニズムにも少なからぬ影響を与えた。

さらには、初期のキリスト教思想家たちにも *Tim.* は考察の対象とされるのだが、ここでは割愛する。

#### （四）新プラトン主義の時代

三世紀半ばにプロティノスは、以上のようなプラトニズムの流れを総合し、さらに深く内面化し、体系化することで、プラトニズムの歴史に大きな転換をもたらした。後に新プラトン主義と名づけられる哲学の誕生である。新プラトン主義における *Tim.* の問題も、それ自体大きなテーマであるが、ここではいくつかの重要な点を指摘するにとどめる。

新プラトン主義においても、*Tim.* は『バルメニデス』第二部と並んでプラトンの著作の中で特権的な地位を占めていた。*Tim.* はたんなる自然学の書ではなく、形而上学、神学の奥義が記された書とみなされていたのである。プラトンとアリストテレスの書へ本格的な注解を著す伝統も、プロティノスの弟子で『エンネアデス』を編纂したボルビュリオスに始まる。彼が著した『ティマイオス注解』は古代末期にかなりの影響力をもった。

次のイアンブリコスにおいて、新プラトン主義は新たな展開を迎える。彼はシリアのカルキスの生れで、二八〇年代にローマでボルビュリオスに師事するが、二九〇年代のうちに師のもとを去ってシリアに帰り、自らの学校を開く。彼が行なったことは、新プラトン主義にピュタゴラス

主義と魔術思想を大々的に導入することであった。彼はいくつもの点でプロティノスやボルピュリオスをも批判し、プラトン哲学をビュタゴラスに遡らせ、神との合一のための技法として、『カルデアの神託』で提起された神働術（テウルギア）を重視し、それを哲学の上位に置くことまでした。その後の新プラトン主義の流れを決定づけ、彼以降の新プラトン主義は後期新プラトン主義と呼ばれる。彼の思想は時代の要請にも合っていたと見えて、新プラトン主義が大きな広がりを見せるのも彼の時代からである。

ギリシア哲学最後の光輝と言われるプロクロスの哲学も、このイアンブリコスの流れを継承したものだ。彼の『ティマイオス注解』は、現存する古代に著されたプラトンの注解書の中でも最も浩瀚なものである。

プラトニズムと魔術・オカルト思想との結びつきは歴史的にも非常に大きな意味をもっている。後一―二世紀にエジプトのアレクサンドリアを中心に、ギリシア哲学と東方の宗教思想との混交から、ヘルメス思想や錬金術といったさまざまなオカルト思想が誕生し、流行した。これらが古代末期にプラトニズムと結びつくことで、プラトンの権威とともに、後のヨーロッパだけでなくアラビア・イスラム圏にも継承されて行く。もともとヘルメス思想や錬金術に

はプラトニズムの影響が見て取れるのだが、それらが新プラトン主義と混交することで、*Hermetism* はこれらオカルト思想の奥義を記した書物だという観念が生れた。ルネサンス期に復活するのも、このような魔術的な後期新プラトン主義で、新プラトン主義はオカルト思想と一体となつて一五―一六世紀のヨーロッパで大流行した。一七世紀における近代科学と近代哲学の成立も、このような思想的背景を無視しては、正しく理解することはできないであろう。

## （五）古代から中世へ

さて次には、*Hermetism* の中世ヨーロッパへの影響にも簡単に触れておく。古代の宇宙論を伝える典拠として、次に取り上げるカルキディウスと並んでよく読まれた重要なものに、マクロビウス（四〇〇年頃）によるケクロの「スキピオの夢」への注解書がある。「スキピオの夢」は、本来ケクロの『国家』第六卷第八章に相当し、プラトンの『国家』第十卷の「エルのミュートス」を模して魂の死後の運命を論じたものだが、これに対するマクロビウスの注解は、新プラトン主義者による『ティマイオス注解』の様相を呈している。

さらには、中世に伝えられた古代末期の哲学的著作はおおむね新プラトン主義の影響下にあるので、それらの著作

においては *Tim.* に依拠した記述がしばしば重要な部分を占めている。例えば、中世を通じてよく読まれたボエティウスの『哲学の慰め』の中でも、最も注釈と議論の対象となった第三巻第九詩は、新プラトン主義的に解釈された *Tim.* の宇宙論の要約と言える。それゆえ、*Tim.* は直接的にも間接的にも、中世前期の思想に大きな影響を及ぼしている。

### 三 カルキデイウスの場合

#### (一) 人物と著作

さらに、プラトニズムの歴史における *Tim.* の重要性は、中世においては決定的なものとなる。十二世紀半ばにヘンリクス・アリストIPPUS による『メノン』と『パイドン』のラテン語訳が現れるまで、カルキデイウスによる *Tim.* のラテン語訳が、西ヨーロッパにおいて読むことができたプラトンのほぼ唯一の著作だったからである。*Tim.* にはこれ以前にもキケロによる部分的なラテン語訳 (276 から 277) までで所々省略されている) があり、例えばアウグスティヌスはこれを用いていたが、それ以後中世ではほとんど用いられていない。

ところがカルキデイウスについては、*Tim.* の翻訳と注解

の著者であること以外には何も知られていない。彼が生きた時代と場所も定かではない。伝統的には四世紀前半に南スペインのコルドバで活動したとされてきたが、カルキデイウスの画期的な校訂版を編纂した *Wassilius* は、五世紀初頭北イタリアのミラノで活動したという説を提起している<sup>20</sup>。また、一般には彼はキリスト教徒だったとみなされているが、これも確証があるわけではない。

カルキデイウスが *Tim.* をラテン語に訳した経緯は、写本に付された書簡から知ることがでる。彼はオシウスという人物から翻訳を依頼され、翻訳だけでは理解し難いと考えて、注解も付け加えたという。カルキデイウス自身は全訳と全篇への注解の執筆を意図していたが、現存する翻訳と注解は、全体の半分弱 (53%) までである。カルキデイウスの注解は、古代末期のプラトニズムの様相を伝える貴重な資料であると同時に、数論・音階理論・天文の基礎知識と、古代の哲学的議論を中世前期に伝えた数少ない文献の一つとしても重要である<sup>21</sup>。例えば、十二世紀に興隆するシャルトル学派と呼ばれる思想家たちの自然哲学も、カルキデイウスの翻訳と注解なしにはありえなかったであろう。

カルキデイウスの注解は、学派に属する者が同学の者たちに向けて書いた書物ではない。想定する読者は、直接の

依頼人を始めとする一般の知識人であり、その多くはキリスト教徒であった。カルキディウスもそれを意識していた。当時カルキディウスの周囲では、かつては一般教養であった数学的諸学の素養が失われつつあり、知識人の多くがギリシア語を解せなくなっていたことは、何より彼の著作自体が証している。このように古典の教養が衰退していく時代にあつて、彼は Tim. のテキストを機縁として、自らが心酔するプラトン哲学を頂点とするギリシアの哲学と、古典の学問の伝統を、同時代の知識人に、さらには後世の人々にも伝えようとして、この注解を著わしたと考えられる。そうだとすれば、古代末期から中世初期にかけて多くの古典文献が失われていくなかで、幸運にも生き残ったカルキディウスの著作は、おそらく彼が期待していた以上の大きな役割を果たしたと言えるであろう。

## (二) カルキディウスの『ティマイオス』解釈

それでは、カルキディウスが彼の『ティマイオス注解』（以下『注解』と略す）において、Tim. の議論の枠組みとなる主要な概念を、どのように解釈していたのかを検討してみよう。

まず、Tim. 解釈史の中でも、おそらく最もよく知られた問題、先にも言及した「宇宙は生成した」(88b) と語ら

れる箇所に対する解釈から始めよう。カルキディウスは、宇宙の永遠性をめぐる問題を論じた『注解』第二三節と、魂の永遠性をめぐる問題を論じた第二六節で、この問題に対する自らの立場を、かなり明確に表明している。

第二三節では、神の作品、自然の作品、自然を模倣する人間の作品という三分法から議論が始まり、続いて、自然の作品と神の作品が対比的に語られる。自然の作品は時間の中にその起源をもつゆえ、時間の中にその終わりが定められているのに対し、神の作品の起源は把握されえないと言われる。自然の作品の起源である種子 (semina) に相当するものが、神の作品においては原因 (causae) であり、それは「神的な摂理」(divinae providentiae) とも言い換えられている。そして結論として、宇宙の起源と始まりは、時間的な意味での始まりではなく、原因としての起源である、という点が指摘される。つまり、宇宙が「生じた」と言われるのは、過去のある時点において生じたという意味ではなく、宇宙はその存在の原因を神に負っているという意味で「生じた」と言われているのだと、カルキディウスは解釈する。これは先にも言及したように、初期アカデメイアのクラントルにまで遡る、プラトニストの間での代表的な解釈と言える。さらに、第二五節では、感覚される宇宙は、知性の対象である宇宙を範型 (exemplum)

として作られたのだから、真の意味では永遠ではないが、永遠な範型の似像として、時間的な意味では過去から未来にかけて常に存在する、という解釈が語られる。

第二六節では、プラトンによれば魂は永遠であるのに、どうして *Tin* においてだけ、魂が生み出されたものとして語られているのか、という問題が提起される。これに対し、カルキディウスは三つの理由を挙げる。最初の理由は、人間の魂が神によって作られたのではないと聞くことで、人々が「人間は古さの優越性の点で神と同等である」と思って、至高の神の支配から免れていると考えることがないために」と言われる。神的で永遠なものの起源は、時間の前後関係ではなく、価値の優劣という点で考察すべきだとされる。二番目は、「我々は作り出された作品の権威や創始者を、精神による秩序づけよりもむしろ手（製作技術）に帰するのが常であるゆえ」と言われる。三番目は、「大多数の人は自分たちの死すべき本性から神的な本性を推測して、すべてのものは生成し、生まれたものでないものは何一つ存在しないと憶測するゆえ」と言われる。そして、「そのように教え込まれている人々の心には、神があたかも製作者（*opifex*）のように、何か手やその他の技術の働きによって「宇宙を」構築したかのように説明する以外には、宇宙には創始者である神が存在することを説得す

ることは難しい」と語られる。つまり、*Tin* における神の宇宙製作は、過去の一時点において行われた事実として語られているのではなく、この宇宙はその存在の原因を神に負っていることを人々に説明するための便宜的なフィクションだという解釈である（第二二八節も参照）。この解釈も、先に触れたように、初期アカデメイアのクセノクラテスらに始まり、後の大多数のプラトニストに継承された見解である。

次には、デーミウールゴスと「知性」と「宇宙の魂」の関係について見てみよう。この点に関しては、カルキディウスの世界観の要と言ってもよい、宇宙を支配する神的原理の階層構造が語られる第一七六―一七七節が重要である。カルキディウスは、第一七六節で「運命についてプラトンが真理そのものに突き動かされて述べたこと」として、こう述べている。「まず、存在するあらゆるものと宇宙そのものは、第一に至高の神によって内包され支配されている。この神は、すべての実在とすべての本性のみなにある、評価と理解の及ばない至高の善である。この神自身は完全性に満たされていて、いかなる仲間も必要としていないが、あらゆるものがこの神を求めている」。

「至高の神（*summus deus*）」はカルキディウスの哲学における最高原理である。ここで神について語られている

言葉は逐一注釈に値する重要な概念だが、いまはプラトン『国家』第六卷の善のアイデアとアリストテレスの不動の動者としての神の観念が融合されていることだけを指摘しておく。<sup>22</sup>むしろ注目すべきは、第一三七節と第二〇一節で、「至高の神」が明らかにデーミウールゴスとしての神と同一視されていることである。

宇宙支配の第二原理が「摂理」である。ここでは摂理がヌースと呼ばれていることに注目したい。さらに、第二六九節と第二九六節では、*Tim.*における宇宙論的な原理である「必然と知性」が「必然と摂理」と言い換えられている。つまり、カルキディウスは「神の意志」である「摂理」を、宇宙論的な原理としての「知性」と同一視しているのである。

さて、第三の原理は運命である。第一七七節では、運命の下位に「宇宙の魂 (anima mundi)」が位置づけられているように受け取れるが、第一四四節と第一五二節では、「実体として考えられた運命」は「宇宙の魂」であると言明されている。「摂理」と「運命」は、ギリシア語ではそれぞれ *epoiousa* と *eiuphēmēnē* で、*Tim.* でも用いられてはいるが、さほど重要な概念ではない。しかし、カルキディウスにおいては、この二つ、とくに「摂理」はきわめて重要な概念である。

宇宙を支配する原理という点では、「至高の神」と「摂理」「知性」と「運命」「宇宙の魂」が、ヒエラルキーをなす三つの主要な原理と考えられる。この議論のまとめに当たる第一八八節でも、三つの原理が語られている。そこでは、運命に当たる第三の原理が「第二の精神もしくは知性と呼ばれる実在」と言われている。したがって、第二の原理である摂理は「第一の精神もしくは知性」であることになる。第一七七節では、宇宙の魂が「第二の精神」と呼ばれていた。したがって、第三の原理は宇宙の魂でもあることになる。

神的な原理に階層構造を考える試みは、プロティノスを待つまでもなく、すでに中期プラトン主義者にも見られるが、*Wassink* は、カルキディウスが述べているのはヌメニオスの説だとしている。<sup>23</sup>ヌメニオスは、三つの神を区別することによって、後の新プラトン主義における階層的な三つの原理（一者、知性、魂）に相当する観念を先取りしていたということは、哲学史の一般的な理解と言えるだろう。しかし、ヌメニオスが三つの神を区別していたということ自体、実はそれほど自明なことではない。<sup>24</sup>少なくとも、ヌメニオスにとって重要なのは、第一の神と第二の神の区別で、彼は第一の神から、神の質料に関わる側面とも言えるデーミウールゴスとしての神を区別して、第二の神

とし、第一の神の純粹性・至高性を確保しようとした。*Wasink* は、カルキディウスもデーミウルゴスを第二の神である摂理と同一視したと考えているが、そのような記述は『注解』のどこにもない。少なくともカルキディウスには、ヌメニオスに見られるような「第一の神」からデーミウルゴスを区別しようとする意図はなく、デーミウルゴスも「至高の神」の一側面とみなされていたと考えられる。プラトン解釈という観点からは、カルキディウスの「至高の神」は、『国家』第六卷の善のイデア（あらゆる存在と認識の根拠）と、*Tim.* のデーミウルゴス（宇宙の生成と秩序の原因者）とが統合されたものと考ええるべきであろう。

また、カルキディウスが摂理を宇宙論的な知性と同一視したことについても、*Wasink* はヌメニオスに由来するとみなしている。<sup>26</sup> 確かに、カルキディウスがヌメニオスに基づいてピュタゴラスの説を紹介する第二九六節においても、「知性と必然」とあるべきところが「摂理と必然」と言われている。しかし、これをヌメニオスの説と即断してよいかは疑問が残る。ヌメニオスの他の資料には「摂理」という語自体が一度も用いられていないし、第二九六節の文言はヌメニオスからの文字通りの引用である保証はなく、カルキディウスの考えや用語法が紛れ込んでいる可能

性が十分あるからだ。いずれにせよ、カルキディウスは特定の人物もしくは著書を引き写しているのではなく、先行するさまざまな文献を参考にしながらも、自らの統一的な解釈を構築していると考えの方が妥当であろう。

次には、イデアと神の関係を取り上げる。第一の形相、すなわちイデアについて総括的に語る第三九九節では、イデアは我々にとつての第一の知性対象であること、物体的事物にとつての尺度、基準であること、非物体的実体であり、生成するものにとつての原因、範型であることなど、イデア論においてお馴染みのことが列挙されているが、ここでは「神の完全なる知性活動」と言われていることに注目したい。「知性活動」と訳した語は *intellectus* だが、ここでは明らかにヌースではなく、ノエシスの訳語として用いられている。<sup>28</sup> 他の箇所（第三〇四、三三〇、三四二節）でも、イデアは神の *intellectus* と言われている。イデアを神のノエーマ（思惟内容）とする観念は古代末期にはかなり一般的に見られるが、カルキディウスは一貫してイデアを神のノエシス（思惟活動）と解釈している。自己完結的な神においては、ある意味でその思惟の対象は自己の思惟活動そのものである。<sup>29</sup> すなわち、神においてはノエシスとノエーマは一致することになるので、それゆえ、神の思惟活動自体がイデアと考えられているのである。

う。

さて最後に、「必然」と「場」の解釈を見てみよう。カルキディウスは第二六八節で、プラトンは「必然」をヒューレーと呼んでおり、それを我々はラテン語で *siuva* と呼ぶと述べている。もちろん、*siu* というギリシア語はアリストテレスの用語で、プラトン自身は術語として用いていない。ちなみに、*siu* は通常ラテン語では *materia* と訳されるが、日常語としては「森林、木材」を意味するのだから、*siuva* の方が直訳に近いと言える。さらに、カルキディウスは、プラトンは *siuva* を「場 (*locus*)」と呼んだとして(第三四節)、「場」を質料と同一視している。これも *Tim.* のテクストには反するが、アリストテレス以来の一般的な解釈と言える。

さて、以上に見てきたカルキディウスの *Tim.* 解釈の最大の要点は、「神」と「イデア」と「知性」と「宇宙の魂」の四者の関係を、階層構造を想定して整合的に理解しようと試みた点にあると考えられる。すなわちカルキディウスは、「神」を頂点として、「知性」を神の意志である「摂理」と解釈し、「宇宙の魂」を摂理に従属する「運命」と同一視することで、これら三者がヒエラルキーをなして宇宙を支配するという構図を考えた。さらに彼は、イデアを神の知性活動として神に従属させ、「知性」の地位に置い

た。これによって、四者の上下関係と役割が整理され、理解可能なものとなっている。宇宙論的な「知性」を「摂理」とし、「宇宙の魂」を「運命」とする解釈には、カルキディウスの時代と関心のありようが大きく反映されている。

このようなカルキディウスの解釈は、*Tim.* のテクスト解釈としては多々問題はあるが、一つの世界観を提示するものと言える。ところが、従来のカルキディウス研究は、もっぱら彼が依拠した著者や著作の探索が中心であった。かつては、新プラトン主義、とくにボルピュリオスの『ティマイオス注解』に大きく依拠したものとみなされていた。しかし近年は、カルキディウスに新プラトン主義の影響を見ることには懐疑的で、むしろそれ以前の中期プラトン主義の影響下にあるとする見方が一般的である。新プラトン主義が登場してからのプラトニズムは、すべて新プラトン主義であったと思われるが、カルキディウスの『注解』は、古代末期にも多様なプラトニズムが存在していたことを示している。いずれにせよ、彼の『注解』は、しばしばそうみなされているように、既存の著作からの無批判な抜き書きの寄せ集めではない。先行思想に影響を受けながらも、カルキディウスには彼なりのプラトン解釈に基づく一貫した哲学があり、彼の『注解』はそれを基調と

して、一定の意図のもとに構想された著作であることを、申し添えておきたい。

## おわりに

それでは最後に、おそらく誰もが疑問に思うこと、*Tm.* はプラトンの著作の中で、なぜそれほど長く特別扱いされてきたのかという点について、若干の私見を述べておこう。もちろんこれは大きな問題で、筆者にも明確な答えは見つかっていない。おそらくいくつもの要因が複合的に絡み合っていたと考えられる。実際 *Tm.* は、それぞれの時代、それぞれの思想家において、さまざまに異なった観点から関心の対象とされてきた。例えば、ユダヤ教徒やキリスト教徒は、『創世記』の神の世界創造を理解するヒントを *Tm.* に求めたであろう。あるいは新プラトン主義者なら、形而上学的真理のアレゴリーとして *Tm.* を読んでであろう。あるいは錬金術師なら、神の創造を自らの手で再現するための秘密を *Tm.* から読み取ろうとしたかもしれない。自然学者や科学者にとって *Tm.* が関心の対象となったことは容易に理解できる。宇宙の始まりと物質の究極は、科学にとっておそらく永遠のテーマだからである。

もう一つ言えることは、伝統の重みである。*Tm.* はま

に「プラトニストのバイブル」<sup>(30)</sup>であった。長い歴史の中で大切にされてきたものは、それだけで権威が備わる。人々はそのにさまざまな思いを読み込み、またそこからさまざまな着想を汲み取ってきた。もちろん、*Tm.* はそれらに応えることができるだけの豊かな思想的潜在力を秘めた書物であった。

## 【注】

- (1) この絵にはもう一つ *Tm.* が描かれている。プラトンの向かって左側に描かれたソクラテスの左手の形は、明らかに *Tm.* の出だしの場面（一人、二人、三人、おや四人目は？）<sup>(31)</sup>（ですか）を表している。
- (2) cf. Speusippus fr. 28 Tarán = Ps-Iamblicus, *Theologumena Arithmeticae*, p. 83 de Falco.
- (3) cf. Simplicius, *In Cael.*, pp. 303-304 Heiberg.
- (4) cf. Proclus, *In Tm.*, I p. 76 Diehl.
- (5) cf. *Ibid.*, I p. 76, 277 Diehl.
- (6) cf. Plutarchus, *Mor.* 1012F-1013A.
- (7) H. Bonitz, *Index Aristotelicus* (Berlin 1870), p. 598によれば四九箇所。二番目に多いのは『国家』への言及で、三九箇所。
- (8) cf. *De philosophia*, fr. 18-20 Ross; *De Cael.* I 10-12, III 2, 300b16-26; *Phys.* VIII 1, 251b17-28; *Metaph.* A 6, 1071b33-1072a5.
- (9) cf. *Metaph.* A 6, 988a7-17.

- (10) cf. *De Cael* I 2-3, III 2, 7; *De Gen. et Corr.* I 2, III 5.
- (11) cf. *Phys.* IV 2, 209b11-12.
- (12) cf. A. J. Festugière, *La Révélation d'Hermès Trismégiste* vol. 2 (Paris 1954), pp. 153-195.
- (13) *Theaet.* 176b. cf. *Resp.* 613a-b; *Tim.* 90a-d.
- (14) cf. Stobaeus, *Eclogae*, II p. 49 Wachsmuth.
- (15) cf. M. Baltes, *Timaios Lokros: Über die Natur des Kosmos und der Seele* (Leiden 1972), pp. 22-26.
- (16) この時代に『ティマイオス注解』を著したとされる人物は以下のとおり(疑わしい者も含む)。エウドロス、アドラストス、タウロス、アルビノス、『テアイテトス注解』の無名著者、ヌメニオス、アッティコス、ハルボクラティオン、セウエルス、デモクリトス、ガレノス。
- (17) cf. Numenius fr. 24 des Places.
- (18) cf. Numenius fr. 1a, 8, 17 des Places.
- (19) cf. E. R. Dodds, "The *Parmenides* of Plato and the Origin of the Neoplatonic One", *Classical Quarterly* 22 (1928), pp. 129-142.
- (20) cf. J. H. Waszink, *Timaeus a Calcidio translatus commentariisque instructus* (London and Leiden 1962, 2nd ed. 1975), pp. IX-XVII.
- (21) カルキディウス注解全体の構成と執筆意図については、拙論『ティマイオス注解』におけるカルキディウスの意図と構想』『フィロソフィア』第九八号(二〇一〇年)三七—五一頁参照。
- (22) カルキディウスにおける神については、拙論『デミウールゴスの変容——カルキディウス『ティマイオス注解』

における神——』『ギリシャ哲学セミナー論集』第一二巻(二〇一五年)三三—四六頁参照。

- (23) cf. Waszink *op. cit.*, p. LX, adn. ad pp. 212, 21-213, 6.
- (24) ヌメニオスの神をめぐる議論については、拙論『ヌメニオスにおける神』『西洋古典研究会論集』第一二号(二〇〇三年)一七—三三頁参照。
- (25) cf. Waszink *op. cit.*, adn. ad p. 74, 11-12.
- (26) cf. *Ibid.*, pp. XL-XLI, adn. ad p. 205, 4.
- (27) 「第一の形相」が質料とは独立して存在する永遠不変のイデアであるのに対し、いわば質料に内在する形相が「第二の形相」で、「生成した形相」「可滅的な形相」とも呼ばれている。『注解』第三三〇'三三三七'三四三'三四四節参照。
- (28) cf. Alcinous, *Didaskalikos*, ch. 9, H 163, 14-17.
- (29) cf. Arist., *Metaph.* A 9, 1074b33-35; Alcinous, *op. cit.*, ch. 9, H 163, 30-31, ch. 10, H 164, 29-31.
- (30) cf. W. Jaeger, *Gnomon* 27 (1955), p. 574.